

「場」を求めて

必要とされたい。理解されたい。居場所がない——。インターネットの世界に自分の居場所を求める人。子育てや介護をひとりで背負い込み、途方にくれる人。退職後、肩書のない自分に戸惑う人。

孤独という暗闇が、現代のさまざまな社会問題を引き起こしています。

かつて、私たちの地域には、農家の寄り合い、あぜ道、子どもたちがいつの間にか集まる場所など、人と人が自然に触れ合う場が多くありました。そこは、地域の助け合いの場となり、生き生きとした活躍の場にもなり得ました。

職業が多様化し、暮らしぶりも変化した現在、個人の生き方を認め合いながら、新しい形で「場」をつくる人たちがいます。

今回の特集では、市民がつくった3つの「場」を訪ね、そこではぐくまれるものを、探ります。



エピソード 1
新屋健康マージャン推進隊
ユニークな男性の交流の場として、地域づくりに貢献しています。



エピソード 2
介護者サロン円(まどか)
家族だけでなく、他人との緩やかなつながりが心を支えています。



エピソード 3
あそぼせ隊
子どもたちの自由な遊び場は、何をはぐくんでいるのでしょうか。

「ジャンボ牌(ばい)」を持つ降旗さん。体積が普通の牌の2.4倍で高齢者にも見やすい。この日は昔から使い慣れた普通の牌を使用。



豊科・細萱(ほそがや)区には3つの公民館がある。新屋(あらや)公民館はその中で一番小さな公民館。ちなみに穂高有明にも同名の公民館がある。



男衆の社交場

エピソード 1 新屋健康マージャン推進隊

賭けない、吸わない、飲まない。

「リーチッ」。

11月中旬、細萱区新屋公民館。今年最後のゲームは、午後7時から2卓を囲み、始まった。

新屋健康マージャン推進隊は、約95世帯を範囲とする新屋公民館の事業として昨年6月に活動をスタート。本年度からは運営の一切を「推進隊」が行い、隔月の第2金曜日にゲームを楽しんでいる。

これまでの参加者は50代から70代までの男性17人。地元で生まれ育った人、数年前に引っ越してきたばかりの人が交わり、牌を握った。

「国士無双が出ましたよ」。

公民館の北側に住む小岩井さんが、牌をバタッと倒した。大役を完成させ、場は大いに盛り上がる。

「ぼちぼち時間ですね」。

開始から2時間が経過した午後9時、代表の降旗敦海さん(70・豊科南穂高)が合図を出し、この日のゲームが終了した。

一般的なマージャンのルールに時間制限はない。しかし、ここではあえてそれを設けている。

「マージャンは刺激的な遊びですから。徹夜になるとや、タバコや酒が無意識に進むこともあります。だから、制約のある中で楽しむ」と降旗さん。

頭脳的な遊戯であるマージャンは、脳の活性化に最適といわれ、近年注目を浴びている。その一方で、その賭博性などから不健康の象徴というイメージも強い。そこで推進隊では、4つの基本方針を定めた。

——賭けない。タバコを吸わない。酒を飲まない。3時間以内に終わらせる——。自らを律したルールの中で、隣人との真剣勝負を楽しんでいる。